

I 糖業の概況

1 海外の動向

(1) 世界の砂糖需給の概況

2010/11 年度における世界の砂糖生産量は 1 億 6,470 万トン（前年度比 3.1% 増）となり、前年度からやや増加した。中国は夏期の干ばつや冬期の寒害等の影響により減産となったが、世界最大の生産国であるブラジルは乾燥した天候の影響で当初の予測は下回ったものの過去最高を記録した。また、ブラジルに次ぐ生産国のインドと世界第 2 位の輸出国であるタイは、国際砂糖価格高騰による作付け増加を受けてさとうきびの生産が前年度から大幅に増加した。EU ではてん菜の単収が前年度の豊作から平年並みに戻ったことにより、生産量は減少した。

一方、同年度の世界の砂糖消費量はほぼ前年度並みの 1 億 6,290 万トン（前年度比 0.2% 増）となった。このような結果から世界の砂糖需給は 2007/08 年度以来 4 年ぶりに生産量が消費量を上回り、期末在庫率（期末在庫量／消費量×100）は 30.3% となった。

※1 データは平成 23 年 7 月現在、農畜産業振興機構が調査を委託した LMC International Ltd. の推計による。

※2 年度は国際砂糖年度（10 月～翌 9 月）、砂糖の数値は粗糖換算。

(2) 国際砂糖価格の推移

ニューヨーク粗糖相場（期近）の 2010 年 4 月～2011 年 3 月の動きを見ると、2010 年初頭までの価格高騰の後、ブラジルやインドなどの主要国における生産回復予測による需給ひっ迫感の後退から価格は下落傾向で推移し、5 月の月平均価格は 1 ポンド当たり 14.60 セントまで低下した。

6 月以降は供給過剰感が縮小して上昇に転じ、その後はブラジルの港湾設備の能力不足による輸出遅延を背景とした需給ひっ迫感に加え、ロシア、パキスタン、南アフリカなどにおける天候不順によって価格は上昇傾向で推移し、8 月の平均価格は 19.22 セントとなった。

9 月以降もブラジル主産地の乾燥した天候による生産量予測の下方修正により価格の上昇傾向は続き、9 月の平均価格は 23.72 セント、10 月は 26.94 セントと急騰して、11 月 9 日には 30 年ぶりの高値となる 33.11 セントにまで達した。

その後、インドの豊作見通しや中国の金融引締め観測などにより相場は一時急落し、11 月の平均価格は 28.90 セントとなったものの、主要消費国であるロシアやインドネシアの輸入増加予測などにより 12 月には再び 30 セント台に回復し、12 月の平均価格は 31.09 セントとなった。

その後も豪州における洪水やサイクロンの被害報道による減産懸念に加え、ロシアの輸入関税引下げの前倒し実施の観測や EU の輸出促進策の検討など輸入需要の堅調予測を受け、相場は 2 月まで 30 セント台の高値水準が続いた。

3 月中旬以降はタイの生産予測の大幅な上方修正とインドの輸出許可などにより需給ひっ迫感が後退し、3 月末の価格は 27.11 セントに下落した。

2 国内の動向

(1) 砂糖類概況

平成 21 年産の甘味資源作物の国内生産量は、てん菜については作付面積の減少と夏期の天候不順の影響による単収の低下により、総収量は 424 万 8,000 トンと前年度を下回った。また、産糖量も 62 万 1,000 トンと前年産を下回った。

一方、さとうきびの収穫面積は前年産を上回り、総じて天候に恵まれて生育が順調に推移したものの、一部地域で干ばつや台風被害により単収が低下したため、総収量が 151 万 4,000 トン、分みつ糖分の収量が 144 万 1,000 トン、産糖量が 17 万 6,000 トン（分みつ糖分）と、それぞれ前年産を下回った。

平成 21 砂糖年度の砂糖消費量は前年度比 1.7% 減の 209 万 9,000 トンとなった。

加糖調製品の輸入状況（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月）は「ココア調製品」が前年度比 1.9%、「コーヒー調製品」が同 10.3%、「調製した豆（加糖あん）」が同 3.1%、「粉乳調製品」が同 1.5%、「ソルビトール調製品」が同 3.2%、「その他の調製品（ソルビトール調製品を含まない）」が同 4.5%と、それぞれ増加した。この結果、これらの品目全体では前年度比 2.1% 増加の 52 万 3,000 トンとなった。

異性化糖の移出数量（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月標準異性化糖換算）の動向は 4 月から 6 月にわたって前年同月を下回り、第 1 四半期は前年同期比 4.6% の減少、第 2 四半期は 7 月、8 月、9 月ともに前年同月を上回り、同 20.9% の増加、第 3 四半期は同 0.3% の減少、第 4 四半期は 1 月、2 月が前年同月を上回ったが、3 月が前年を下回り、前年同期比 0.6% 減少となった。

この結果、平成 21 年度の移出数量は前年度比 4.1% 増加の 80 万 2,000 トンとなった。

(2) 砂糖類の国内価格の推移

砂糖の日経相場（東京）上白大袋の価格（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月）は、粗糖の国際価格の下落を受け、精製糖企業各社が 7 月出荷分から建値（特約店に対する出荷価格）を 1 キログラム当たり 6 円引下げたことに伴って 176～177 円となり、9 月までこの水準で推移した。その後、国際価格の再上昇を受けて精製糖企業各社が 10 月上旬出荷分から建値を 6 円引上げたことから 182～183 円となり、11 月までこの水準で推移した。その後国際価格がさらに上昇したことから精製糖企業は 12 月下旬に再び建値 7 円の引上げを行い、価格は 189～190 円となった。

一方、異性化糖の大口需要家向け価格（平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月果糖分 55%、東京・タンクローリーもの）は、異性化糖調整金に応じて、平成 22 年 4 月下旬に日経相場が 1 キログラム当たり 3 円上昇して 119 円～123 円となり、7 月には 3 円下落して 116～120 円、10 月には 2 円上昇して 118 円～122 円となった。その後原料とうもろこしの国際価格の高騰を受け、平成 23 年 1 月に 6～7 円上昇して 125～128 円、同年 3 月には 3 円～4 円上昇して 128 円～132 円となった。

3 国内産糖の生産動向

(1) てん菜糖

ア てん菜の生産

平成 22 年産てん菜の作付面積は前年産比 1,882ha 減の 6 万 2,559ha、栽培農家戸数は前年産比 292 戸減の 8,563 戸、一戸当たりの作付面積は前年産比 0.03ha 増の

7.31ha となった。

北海道平均の1ha当たりの収量は49.4トン（前年産56.6トン）、総収量も309万トン（前年産364万9,000トン）と平年を下回る低収となった。一方、根中糖分も15.3%（前年産17.8%）と平年より低い糖分となった。

イ てん菜の生育概況

てん菜の植付け開始は天候不順などの要因によって平年より3日遅く、最盛期も平年より3日遅れとなった。

生育初期においては、5月中・下旬が低温で経過し、播種・定植作業の遅れもあって直播の発芽・定植後の活着がやや不良で推移した。6月1日時点での生育状況は平年より2～6日遅れとなったが、6月中旬以降は高温によって地上部の生育が回復し、7月1日時点の生育状況は全道平均でほぼ平年並みであった。夏期の気象は7月から9月にかけて気温が高めに推移し、特に8月下旬は最低気温が4℃以上高く推移した。また、7月中・下旬及び8月中旬のまとまった降雨によって褐斑病や湿害が発生し、9月1日時点の生育状況は地域により大きな差があった。褐斑病と湿害での根部の腐敗状況（主に黒根病）の発生は全道的に多発生となった。特に高温・多雨が褐斑病の発生に適した条件であったこと、また、生産現場では秋まき小麦の収穫時期と重なったり、ほ場の過湿や防除通路の滞水によっててん菜の防除作業が進まなかったことなどが病気のまん延を防げなかった要因と考えられる。

その他の病害虫発生状況については、そう根病は少なく、ヨトウガの発生量が多い状況であった。

ウ てん菜糖の生産

平成22年産の産糖量は産糖歩留りが15.09%（前年産17.03%）と前年を下回り、1ha当たりの収量も前年と比べ低収量となったため、46万6,488トン（前年産63万9,946トン）となった。このうち、てん菜原料糖は6万3,321トン（前年産18万8,496トン）で総産糖量に対する割合は13.6%（前年産29.5%）となった。

（2）甘しゅ糖～鹿児島県産～

ア さとうきびの生産

平成22年産さとうきびの収穫面積は前年実績より183ha（1.8%）増加して1万465haとなった。

作型別割合では、株出64.0%（前年産62.0%）、春植え21.9%（同22.2%）、夏植え14.1%（同15.8%）となっている。

10a当たりの収量は、前年実績より17kg（0.3%）増加して6,188kgとなった。地域別では、喜界島が537kg（8.2%）増加して7,098kg、徳之島が283kg（5.4%）増加して5,571kg、与論島が340kg（6.3%）増加して5,754kgとなったが、種子島、奄美大島及び沖永良部島で減少した。そのため、さとうきびの生産量は前年より1万3,091トン（2.1%）増加し、64万7,542トンとなった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は前年より89戸（1.0%）減少して9,248戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

種子島では、春植えの植付け作業が降雨の影響により遅れ、株出が前年産の収穫期間の延長により管理作業が遅れたため、全体的に生育が遅れた。奄美地域では順

調に作業が進んだ。

○生育旺盛期（6月～9月）

6月の日照不足や長雨による影響から平年を下回る茎数となり、生育が緩慢に推移した。沖永良部島や与論島ではメイチュウなどの被害が多発した影響も大きく、喜界島、徳之島、沖永良部島では9月に干ばつ気味となり生育が緩慢となった。

○生育後期（10月～収穫期）

10月下旬の強い風雨や台風14号の影響により、生育が緩慢となった。また、1月～2月の低温により、登熟は緩慢となった。

ウ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留りは前年実績より0.1ポイント下回って11.77%、含みつ糖の歩留りは前年実績より0.7ポイント下回って11.90%であった。

産糖量は、分みつ糖が前年実績より837トン（1.1%）増加して7万5,561トン、含みつ糖は前年実績より144トン（27.1%）増加して675トンとなった。

（3）甘しゅ糖～沖縄県産～

ア さとうきびの生産

平成22年産のさとうきびの収穫面積は前年実績より14ha（0.1%）増加して1万2,761haとなった。地域別では沖縄地域が202ha（2.8%）の減少、宮古地域が171ha（4.3%）の増加、八重山地域では44ha（2.7%）の増加となった。

作型別割合では夏植が42.8%（前年産45.1%）、春植が13.9%（同13.2%）、株出が43.2%（同41.7%）となった。

10a当たりの収量は前年実績より472kg（6.8%）減少して6,429kgとなった。地域別では沖縄地域が178kg（3.2%）減少して5,419kg、宮古地域が966kg（11.0%）減少して7,812kg、八重山地域でも848kg（10.5%）減少して7,203kgとなった。そのため、さとうきびの生産量は前年より5万9,254トン（6.7%）減少して82万403トンの実績となった。

また、さとうきびの栽培農家戸数は前年より48戸（0.3%）増加して1万7,297戸となった。

イ さとうきびの生育概況

○生育初期（3月～5月）

月平均気温は各地域とも概ね平年並みとであった。

降水量は3月で平年以下、4月はほぼ平年並み、5月は本島地域、久米島、大東地域で平年を大きく上回っていたが、宮古地域、石垣島では平年を下回った。

日照時間は3月で平年以上であったが、4月～5月は平年を下回った。

○生育旺盛期（6月～9月）

月平均気温は各地域でほぼ平年並みとであった。

降水量は各地域でほぼ平年並み以上とであった。9月まで宮古地域、石垣島とも降雨に恵まれたものの茎数が少なかった。

日照時間は6月～7月は各地域とも平年の60%～70%程であり、9月は平年並みとなった。

○生育後期（10月～収穫期）

月平均気温は10月～12月にかけて各地域とも平年並みが続いた。1月は平年より10%下回って、2月は平年並み、3月は再び平年より10%下回った。

降水量は、10月は各地域で平年を大幅に上回った。特に石垣地域では平年の5倍となった。

日照時間は、10月は大東地域を除き各地域で平年の70%前後となった。1月も各地域で平年の40%~60%となった。

11月に大東地域に襲来した台風14号は、登熟期であるさとうきびに葉片裂傷や倒伏の被害をもたらし、台風通過後もほとんど雨が降らず塩害の被害があった。

ウ 甘しゅ糖の生産

分みつ糖の歩留りは前年実績より0.78ポイント下回って11.67%、含みつ糖の歩留りは前年実績より1.26ポイント下回って13.07%となった。

産糖量は分みつ糖が前年実績より1万2,787トン(12.7%)減少して8万8,269トン、含みつ糖は前年実績より1,378トン(14.2%)減少して8,339トンとなった。